

加藤玄智博士の学績

小林 健 三

はじめに

博士は略歴の示すとおり、明治六年六月東京で生まれ、昭和四十年五月御殿場市東山の学勞窟研究所で、九十三歳の天寿を完うまっとうされた。学究として最高の榮譽をかざる紫綬褒賞を授与されたのが昭和三十五年十一月三日である。八十七歳のときであるが、翌三十六年『神道信仰要系序論』一卷が記念出版として記念出版会から発行され、会員に頒布された。

博士の業績の全容は本書によく見えるが、紫綬褒賞の授与は、「神道の宗教学的研究を以て宗教文化の究明に尽せる功績著明なるにより」と明記してある。これを分析すると、その一つは宗教学であり、その二は神道の宗教学的研究となる。略歴でもわかるように、博士は明治三十九年七月から東京文科大学講師を委嘱され、宗教学を講義している。ついで大正十年四月から東大助教として、「神道講座」を分担されて、定年の昭和八年まで神道学を講義された。そのほか国学院大学教授として宗教学を担当、駒沢大学（教授）と大正大学・神宮皇学館（臨時講師）では神道を陸軍経理学校（臨時講師）では東西思想比較研究を講義されている。宗教学・神道学・比較思想史の三領域にわたるが、その本領はといえば、「神道の宗教学的研究」であり、従来欧米学者から低次の宗教と目され、それが通説とな

つていたのを、幅広い比較宗教学の造詣を基盤に、文明教期の「神道」が世界既成宗教と伍して遜色のないものとする緻密な実証的研究を大成して、欧米学者の蒙を啓いた点にあるといえよう。博士は戦後ユネスコの東京支部の委員も委嘱され、日本学研究所の欧州の学会の紀要にも流麗な英文で寄稿され、英国の権威ある百科辞典ブリタニカにも「神道」の項を執筆されている。古風の表現を使うと、和魂漢・洋才と言わざるを得ぬ。博士晩年の念願は、名著『本邦生祠の研究』の続篇の完結であり、それとともにこれを根拠として形式化・マンネリ化した神社神道界に新風と活気とをもたらせることにあったと推測される。『生祠の研究』についてはいっさい安津素彦教授の論文に譲り、ここでは、幅広い博士の著作活動を通して、博士の学績を示す二、三の事例をあげて、博士の風格を偲ぶことに止めた
い。

本 論

本稿では、博士九十三年にわたる長い生涯を、研究の進展にポイントをあわせ、自立期・展開期・晩成期の三期に分け、加藤宗教学の成立とその特質について述べてみることにする。

自立期（明治六年生誕から同四十五年まで）

加藤宗教学の成立といえば、ふつうは明治四十五年（一九二二）三十九歳のとき博文館から刊行された大著『宗教学』をあててよいとみられる。『宗教新論』『哲学概論綱要』『通俗東西比較宗教史』『宗教学上より見たる釈迦牟尼仏』などをへて、すなわちそれらの含蓄をふまえたうえて書名の示すとおり、『宗教学』の展望を一書にまとめたからである。四十代といえれば一家の説を樹立する年齢であり、古来このころ一家の学を提唱された学者が少なくな

い。哲人孔子の言に「四十、五十にして聞ゆるなくんば、これまた畏るるに足らざるのみ」(『論語』卷五子罕)とあるとおりである。

しかし、わたくしとしては、博士が東大を卒業されてからさらに大学院で研鑽を深め、明治四十二年大学院を卒業されたという案外目につかぬ事実を重視したい。哲学科を卒業し、東大宗教の講師、陸軍教授をやりながら、十年間感ずるところがあつて切実な根本問題に思いをひそめて研究をつづけたことと推測される。大学院で何を研究したか、ということは明治四十二年、論文『知識と信仰』を東大に提出して文学博士の学位を授与された、という事実がもっとも雄弁に語っている。この論文は東大図書館に蔵されて発表しないうちに、大正十二年の大震災のため烏有に帰してしまつた。しかしこの作業の助手となつて内助の功をつくされた故節子夫人の摘記『知識信仰論』と『知信関係論史諸相』の二冊が大正大学に寄贈されているという。田辺勇氏の注によれば、学位論文の主旨は、「泰西学者の多くがこの問題を二元的に取扱つているのに対し、先生は一元的に而も學問と宗教の両者を対等の位置に於てその協調を策せられた」点にあり、その卓見を窺知することができるという。

博士は寺家の生まれであつたが、青年時代知識と信仰との関連について欧米学者の二元論について疑問をいだき、その解決に長く煩悶されたという。その解答が『知識と信仰』という学位論文によつて提示されたとみることが出来る。博士の体系は、ふつう、仏教学者のいう信・知・行の順序でなく、知・信・行の三位一体(三品即一)観となつているのが特色であるが、これが生涯を貫いている。戦後「神道神学」「神道宗教」という名が採用されているが、晩年の遺著が『神道信仰要系序論』で、神道神学という名称をさけて神道信仰という平易な用語を使用されたことに注目したい。

展開期(大正元年から昭和二十年まで)

この期間は博士三十九歳から七十二歳にわたる三十三年間をさす。東大の定年は六十歳であるから、ふつうはこれから東大名誉教授となつて、研究所をおこして所長に収まるのが通例だが、博士の場合はこれとは違つて、通例は通しない。そればかりか東大にいたころからふつうの教授クラスの三倍にあたる活躍の時代が終戦までつづいてゐる。終戦のときが七十二歳であるが、終戦後も意気少しも衰えず口述によつて続々と大作を発表すること二十年の久しきに及んでゐる。

大正元年から終戦まで三十年間は、主として明治聖徳記念学会研究所の常務理事・所長をかねて縦横の広汎な研究活動をされているから、明治聖徳記念学会研究所時代と表現するのがあたつてゐる。

この時期は、博士の最も得意な時代であり、まさに円熟期と申すことができる。大著『神道の宗教学的新研究』（大正十一年）『神道の宗教発達史的研究』（昭和十年）『宗教学精要』（昭和十九年初版・同三十五年三版）を軸とする数多い著作群がやつぎばやに刊行され、学界を驚嘆させたこというまでもない。

この研究所時代の、とくに注目すべき二、三の点をつぎに述べてみよう。

第一は、博士が研究所に冠するに「明治聖徳記念」という学会名をつけられた動機である。この学会名のことば創刊号にも詳しく見えているが、博士の『本邦生祠の研究』（昭和七年刊）付録にのせられた「本会沿革略」には、その活動の沿革を述べるとともに、とくに大正十一年宮内省から御手元金の恩賜、ならびに各宮殿下の特別賜金の拝受によつて、褒章条令による公益団体（財団法人）となり、基本金約十万円、国内的にも国際的にも微力を致したことが見え、その点でまさに歴史的文献といつてよい。その全文をつぎに引用する。

本会沿革略

本会は明治聖帝不朽の盛徳を永遠に記念せんが為に、二千有余年来の我が国固有の精神文明を、現代學術の進歩せる研究方法に由つて根本的に攻究し、内に向ひては我が邦人をしてその自覚を喚起せしむると同時に、外に向ひては

其研究結果を外国文を以て発表し、以て真の日本を海外に紹介することを目的とせる日本学会にして、大正元年十一月三日明治聖帝の御記念事業として起れるもの。

爾來毎月例会の講演会に、各地の公開講演会に、本会研究所出版の研究報告及び紀要及び貴重古典の校訂・上梓等に、將又内外文を以てせる各種の単行本に、着々本会の目的遂行に努力し来れり。

本会の研究所には加藤玄智、長井真琴の二文学博士、星野日子四郎文学士あり、常に如上の研究に当り、本会の研究所より出版せる我古典、古語拾遺の英文研究、英文神道研究の如き、又サルエイ夫人の昭和御即位奉祝歌の如き、サドラ教授英訳胡蝶の如き、仏国大学教授レビ博士訳仏文神道の如き、泰西の日本学界に寄与せる本会の一大業績なりとす。

大正十一年宮内省より御手元金の恩賜、及各宮殿下の特別賜金を拝受したるは、本会の感激に堪へざる所、本会は目下褒章条令による公益団体にして基本金約十万円、以て国家的にも又國際的にも聊微力を效せるもの、如上本会の事業に対し広く内外有志の翼賛を切望す。

右の沿革略に見えるとおり、この研究所の活動は大学の学会以上の成果を収め、その広汎な著作活動は内外の注目をひいた。例会を毎月連続してつづけること、それをさらに紀要に収めて発表するほか、古典の校訂出版の上にも多大の寄与をなした。世界文庫刊行会から『世界聖典全集』が刊行されるや、博士は『日本書紀神代卷解注』（大正九年）『古事記神代卷注』（大正十一年）を発表されたが、研究所として最も力を致したのが『校本 古訓古語拾遺』（昭和六年）で、加藤博士、星野日子四郎学士、溝口駒造氏三氏の校訂にかかる。本文二十四ページ、付録に古語拾遺関係書目（異本、註釈書「邦文・外文・補遺・英文古語拾遺三版広告」）二十ページを収めている。

巻首の緒言にその経過の大体が克明に叙述されている。これも古語拾遺研究史上の歴史的文献になると思うので、

その経過のところだけ引用しておきたい。

「本書は曾て本会研究所に於て、数回嚴訂の後に財団法人明治聖徳記念学会紀要別冊として刊行した『嘉祿本古語拾遺』を第一底本とし、別に前田家本・磨仁本を参照して稿本を作成した後、諸家の訓点本・註釈本と比較して、旧訓の不穩当なるものは之を除去し、比較的定本に近づくやう校訂補正を試みたものである。

此の校訂補正は、古語拾遺定本を作らむとする意図から出発してゐる。斯かる意図は、早く既に大正十三年に於て、英文古語拾遺が、本会の加藤玄智・星野日子四郎両名に依つて世に公にされた頃から抱懷せられたが、其の後に、池辺真樸大人の『古語拾遺新註』栗田寛博士の『古語拾遺講義稜威男健』並に前田家本・嘉祿本・疑齋等の校訂刊行を続行するに及んで一層その度を高め、此の機会に於て定本古語拾遺を世に送ることは、必然的に本会の任務であると自覚するに至つた。此の自覚に強度の刺戟を感じた本会研究所員等は、爾來層加的熱意を以て、能ふ限り研究材料を蒐集し、各自別箇の立場から研究を積んだ後、昭和五年一月二十三日、第一回會議を開き、以後は毎週二回、定例研究会を催して、各自の意見を交換し、其の決定したものを記録に留めて、三月二十日に漸く第一読会を終つた。此の第一読会の成果は、統一を図るため一人の手に移され、適當の加除が行はれた後、四月二十一日から開かれた第二読会に附議されたが、五月二日の夜を以て第二読会は終了し、其の間更に嚴密なる校訂を加へられた稿本は、改めて外間の批評を求める為、別に二通を謄写して、其の一通は會員台北帝國大学教授安藤正次氏に、他の一通は會員国学院大学教授河野省三氏に送付して批評を仰いだ。爾來両氏は学事多端の間に懇切なる批評を加へた上、之を附箋に属して回送せられたが、本会では二本の揃ふのを待つて、第三読会を六月月上旬に開き、三週に互つて、研究を重ね、斯くして竟に最後の決定に到着したものが即ち本書である。

如上の過程に於て本会研究所員等は、末梢的な字訓の異同に対してすら、屢々細心の注意を払つて決定的音訓を把握することに苦慮したが、此の努力は終局に於て、絶対理想的な定本を作成することは不可能に近いと云ふ

結論に直面した。我々が憑拠した三本の旧訓が必ずしも原著者齋部広成当時の用語を意味しないのみならず、僅少なる遺存文献を以てしては、到底広成自身の用語を決定的に跡づけることは為し得られないからである。勿論此の欠陥は、後代学者の研究成果に依つて幾分補正することができるが、それは比較的に止まつて、畢竟近代学者の校訓本と歩調を合はす事になる。故に我々は古語拾遺の訓点本としては最も古い前陳三本の旧訓を尊重し、其の不穩当なものは之を中古以来の典型訓に更へた。随つて本会自ら本書を「定本」と称することを差控へて、敢て之を「校本古訓」と標記した」。(以下略)

この緒言のかかれたのが昭和五年六月夏至日で、博士五十七歳のときである。定本ができず、校本となった所以が明らかになされている。研究所時代の業績として筆頭に位するといわねばならない。

第二は画期的な『本邦生祠の研究』の刊行である。サブタイトルに「生祠の史実と其の心理分析」と示したことによって、本書の内容と研究方法とを知ることができる。本書の特質については安津博士の論文に言及されているので、ここでは省略したがうことにする。

第三は『神道書籍目録』上下二巻の編集と刊行である。本目録上巻は明治以前を収め、着手してから二十年、印刷に三カ年を要してようやく昭和十二年、学会創立二十五周年の記念出版として、翌十三年二月、同文館から初版(五〇〇)発行、同十八年再版(五〇〇)を重ねた。B5判六五〇ページにおよぶ大著である。

下巻すなわち明治・大正・昭和三時代にわたる下巻の編集もひきつづいて行なわれた。昭和期は皇紀二千六百(一九四〇)年祝賀の年である昭和十五年を限り、それを編集刊行する予定であった。しかるに下巻すなわち近代の部は神道文献激増の時代にぞくし、わずか二年間の編集期限では実現も覚束ないとし、一年間編集を延期することにして仕事を急いだ。しかるに昭和十六年大東亜戦争となつて、世は走馬灯のごとく急転回、書物の刊行も次第に困難さを加えた。下巻発行のため印刷用紙だけは早く用意しておいたが、印刷所三秀舎が人的物的両資源の不足のため印刷が

次第に遅れてきた。原稿の作成が終つて、しかも印刷所で長年月を空費させられるほど精神的苦痛はない。しかも昭和十八年夏には編集主任の松下松平氏が急に神祇院に転任、三秀舎の校正も遅延がちとなり、時局の影響が本書刊行上にもありありと見えてきた。松下氏のあと新研究所員平沼一氏はいり、印刷も三秀舎と打合せて共同印刷の協力を得ることができた。平沼氏は前任者の仕事を半途にうけついで本文の校正と同時に五十音順とABC順の書名索引、編・著・録・述者名索引の作成とその校正とに約一カ年にわたる努力を傾倒された。下巻の序文の中で会長林博太郎博士はその感想を述べてつぎのように言っている。

「之を要するに、明治・大正・昭和三時代の神道書籍目録の編纂刊行は、時局相が織込まれて、関係者は巧遅を捨てて拙速を選ばれたと声言されてをるにも拘はらず、余は本書を以て関係者一同の苦心慘怛の学的努力の結晶であることを確認し、能くこの難局を突破されて今日その完成を見るに至つた学的良心に対しては、満腔の敬意を表せざるを得ない次第である」

「本書の編輯刊行を多年に亙り、寢食を忘れて都督された前本会研究所長、現本会名誉研究所長加藤玄智博士の刻苦と大努力微りせば、斯の大事業も斯る難局に際して頓挫の憂目に陥つたかも知れぬ事を思ふ時、此に特記して加藤編輯都督に甚大なる感謝と敬意とを表せずにはをられぬ次第である。」

本書の編集刊行にさいし、高松宮家からご下賜金、財団法人啓明会から四千五百円の出版費補助、同服部奉公会から二千円、会員松江春次氏一千円、故会員前田利為侯爵二百円、同福島甲子三氏夫人一百円を始めとして、評議員草鹿祐吉氏五百円などの協賛があった。

それにしても戦後二十八年の時期に、B5判七〇七ページの大著を刊行することは一書店のよくすることではないし、戦後従前の約束を破つて未刊に終つた書籍類の多かつたことを思えば、いかに内外に知られた明治聖徳記念学会でも独力を以てしてはよく大成しうべき事業ではなかつた。そこで学会では幹部たちの総意の下に、本会を明治神宮

に献じて、神宮諸事業の一つとして、明治天皇御記念事業たる本会を長育して頂くにしかずとの結論の結果、明治神宮伊達権宮司に記念学会代表宮川仁蔵理事が交渉し、昭和二十八年夏、所期の目的通り、納受の榮に浴することができた。神宮側では、その一つの事業として、記念学会が編纂に着手してまさに印刷を終えようとして、殆んどその全部を全うしたものを取捨整理して、ついに本書の形に於て、新にまとめあげることになった。神宮関係諸氏の尽力の潜んでいることを忘れてはならない。かつ、下巻刊行にさいし神宮は多大の出版費を支出して神道文化の昂揚に尽されたということを特記しておきたい。『欧語神道文献書籍目録』一卷も主任カル・ライツ博士、上智大学教授ヴィルヘルム、シフアー博士らの協力によって昭和二十七年（一九五二）までのものを含めて神宮から刊行することができた。

これらの『神道書籍目録』（上、下及び欧語）三巻は、記念学会加藤博士の発案によって進行し、数多くの学者の協力をえて延々四十一年を要して成就した国家的大事業の一つと申してよい。下巻の序文は昭和二十八年九月不二山麓駿東東山学旁廬にて博士が執筆されたもので、この大事業の動機と内容とにふれ、ついで後学に託すということで極めて重要な提案が見える。神道の良書の目録を『神道書籍目録精撰』と命名して刊行することがそれである。「実を言えば、この方の仕事を玉成せんが為に、前記目録姉妹二篇を先づ編纂した次第である。而も私の場合に於ては、すでに頽齡八十、到底衰眼半盲の老病翁で、自らこの大業に当る訳には行かないから、この学的事業は、後の君子をまつより外致し方がない。この残された事業は、神道当事者を中心として、斯道の学者相集り、腕に縊をかけて精進されたならば、有益にして立派なる結果が挙げられることと信ずる。至嘱」これが結句である。

晩成期（終戦から昭和四十年まで）

この期間は博士七十二歳から九十二歳にわたる二十年間をさす。御殿場市東山の学旁窟研究所にあって敗戦後の日本の急変を窓外に眺めつつ、静かな晩年を過ごされた実のりの晩秋にあたる。白内障が進んで半盲の不自由な状況にあったが、博士の精進常案の意気は少しも衰えず、東西古今の書物はその頭腦のなかに収められて、秘書役をつとめた杉浦千代女史に口述して著述に精進された。この時期の特徴は、神道教化について種々思いをめぐらされ、加藤宗教学の実践に特別、意を用いられたという点である。

昭和二十五年（一九五〇）七十七歳の喜寿祝賀の心をこめて、慧命存稿会編『慧命存稿目録』が出版された。博士の業績一覧あるいは学歴書ともいべき貴重な書であるが、僅かな部数と見えて寓目の機に接することが困難である。昭和三十六年（一九六一）米寿の記念出版として記念学会から『神道信仰要系序論』が刊行された。藤女会々員である梅田義彦博士が主に編集校正にあたったが、本書のなかに晩年の博士の学の全容と、餘録「直言直行」とによって博士の人柄が浮彫にされている。

ふつうわれわれは、あれほど高名な碩学であった博士のことだから、引退後も恩給や多くの門人たちから支援をうけて、文字通り悠々自適、晴耕雨読の老後を送られたに相違ない、と想像するであろう。もちろん左様な学者もおられたことであろう。また戦後急変して新時代に活躍した人びともいたであろう。

ここで考えなければならぬ重要な点は、博士は恵まれた教授のように、東大文学部神道講座を十二年間も担当されつつ、ついに東大教授にならずして、定年で引退されたということ、（東大文学部に神道講座の教授が設置されたのはそのあとのことである）しかも東大では「神道」を講義されていたという事実である。戦後、周知のとおり神道研究者は公職・教職から追放された。これは国立、公立、私立を問わなかった。博士は昭和八年（一九三三）六十歳のとき東大停年、本官並兼官免、特旨正四位に陞叙された。したがって博士の場合は右の事例には該当しない。博士は外に私学でも神道を講義されたことがあるが、これらはいまは除外しておく。戦後、東大神道講座と研究室は廃止され、宗教

学科内に民間信仰の名で存置されたときが、内容は異質のものになったであろう。

博士が最も長く奉職したのは陸軍教授としてであった。明治四十年（一九〇七）三十四歳で、陸軍教授拝命、士官学校付き、高等官六等に叙せられ、英語学を担当された。これは当然、恩給がつくわけである。しかし戦後十年間は、陸軍につとめていたからという理由で、恩給が与えられなかった。戦後十年の生活がいかに苦しかったか、文字通り学究即学窮の表現がピタリとする。

このことを頭において、学勞窟時代のことを思いうかべてほしい。米寿出版の『神道信仰要素序論』の「あとがき」に博士は切々の情をこめて一文を綴って載せている。歴史にのこる大文章であるので、その大要を引用しておく。

「思うに私は陸軍教授として英語教官であった為、終戦当時文官も又武官並に取扱はれて、多年公勤の報いである恩給を召上げられてしまった。後約十年後には是は回復されたが、多年浪人生活の瘡痕はなかなかそう容易に癒えるものではない。

是がため私は決心して其過去公生活の実状を吐露し、慶弔共に物質的交際は是を知友間に辞謝する事の已むなきに至った。然し私の此ささやかな恩給でも、国家の危急を救うに足る九牛の一毛ともなれば寧ろ幸と思ひ、自身切詰めた生活に山中疎開の隠栖を甘んじて居った。然し夫でも矢張り慶弔の贈答に加わり得ぬことは、世間に対し相済まぬ思いを深くして居った。

故に私は決心した。当方より此種のお附合いが出来ない以上は、今後他人様からこの種の御配慮を受けては相ならぬと存じ、不受不施の実行に、僅かに安住を求めていた。

然るに私の米寿も訪れ来たり、褒章授与の如き天機に接した為、今回旧知新友が其祝意を表したいという申出を辱くした。然し前記の理由で是を固辞した。

茲に於て話は一変して、有志諸賢から私の拙き学究の業果を、私より提出して是を一本に収め、学界を利する意味を以て其記念出版事業を試みようではないかと申出された。依つて私も其好意ある友情に感謝し、本書の公刊をお願ひするに至つた。

尚もう少し溯つて私が学界に活動してをった頃の、世間の情勢を回顧するに、明治大正昭和の終戦当時まで、代々の政府当局は神社信仰を以て宗教と認めず、宗教圏外の存在として固執して居つたから、私は東京帝大に宗教学を講じ神道講座を分担して居つた頃は、神社信仰を中心とした神道を、宗教の一種として研究対象とする学風の如きは、其時々政府が是を白眼視し、継子扱いをして居つた当時であつて、自から南風競わざる感があつた。

然るに終戦後は、神社信仰の如き神道が占領治下に於てはアラレもない戦争の指導原理でもあつたように、外力から睨まれて、神道指令等の法規に依つて束縛され、此処に神道は宗教の一種として認められはしたもの、一難去つて又一難いたるといふ有様に終始し、私の専攻学科であつた神道の研究は、学難を蒙つたこと甚だしきものがあつた。

かような情況の下にあつて私は、日夜研鑽を続け、不撓不屈・精進常業の根本精神を堅持し、私は厭わず倦まず、隆替を以て心となさず、平然として自己の研究に没頭してきた結果が、世の注目を受けたものか、昭和三十五年文化の日に、其学功に依り、紫綬褒章授与の天眷に浴した次第である。

そこで私はもはや米寿の老齡、日暮れて道遠しの感を深くし、本書の冒頭にある『神道信仰要素系序論』を以て将来の研究を同志諸君に委嘱し、衰眼朽腦の老翁が学界から引退しようとも思つた心を一変し、棺を蓋つて事始めて定まるといふ時まで、拙き研究を更に驚馬に鞭うつて進めようとの決心を新にした次第である。

しかも此事は勿論私の死後に於ても、後世恐るべき来者の諸賢同学の御奮励に俟つもの多き事は申すまでもなく、至嘱に堪えないところである。

昭和三十六年（一九六一）四月八日

御殿場学勞窟研究所にて

米寿半盲 藤 玄 学 叟

明治六年（一八七三）六月十七日生

それから二年たって、昭和三十八年五月十一日づけで、筆者は博士から一通の書翰を頂いた。私信の公開は憚りがあるが、九十歳の博士が託された遺言ともみられる重要な趣旨を含んでいるので、今回あえて、公表することにしよう。私は東大在勤中より神道の人即神教的性質を明かにするため、死後の神社は勿論、生祠の研究を達成する必要を感じ、講義に著書に、今日まで努力してきましたが、私もこの六月で満九十歳、エンマ行も目前ですから、この研究が、理論的に神道の特性を明かにすることに努めるは勿論、神社神道の実際に適用して、道徳と結びつけて、現代人心の引締に役立つよう向けて行きたく、諸彦も御同感と存じます。依って取敢えず、諸彦にこの方面の御留意を特に願っておきたいのです。今後とも、私が始めた生祠研究の理論と実際が、諸彦の御尽力に依り、進めて頂ければ幸いです。

私が曾て公けにした『本邦生祠の研究』は、生祠の理論づけをやっただけなので、まだその応用は不十分、世間一般は勿論、神道研究家の間にも留意する人少ないようだが、諸彦の麗筆によって、機に処し変に応じて、この目的を達し得るようご尽力願います。例之、拙著中に引用した、小島蕉園大人の生祠、西忠義大人の生祠の如きは、目下人心の引締のために、紙・誌等にて公けにすれば、大いに役立つことと存じます。乞御一読。

右諸彦に特に、御依頼申し、次第に同志も出来れば結構と存じます。

右茫漠たるお願いだが、死期の近づく私より、こちらで一寸、お願いしておく次第です。右よろしく。」

博士は明治神宮と乃木神社とは特別に關係がふかく、さらに、出雲大社の顧問として機関誌「幽頭」にも寄稿された。昭和二十七年二月から同二十九年三月まで掲載された長論文が『学校に於ける宗教情操の研究』であるが、のち訂正増補し今日の青年にも直ぐ理解できるように改作して、題名を『学校教育と成層圏の宗教』と名づけて、単行本として、昭和二十九年十二月、出雲大社教々務本庁内幽頭社から刊行された。定価三〇〇円B6判一八一ページの小冊であるが、外篇に田辺勇撰「学田拾穂」―加藤玄智博士・宗教研究の学系と先生の風格―と題する論説が載っており、委曲をつくしている。『成層圏の宗教』と題するこの新著は、加藤宗教学を圧縮した今日いう新書判にあたるが、名著である。この研究の発端は、学勞窟研究所にあって、研究員東京女子学院高等学校長酒井堯氏ならびに同研究員末光希仙氏の二人を相手として学校における宗教々育はいかにあるべきか、というゼミナールを始めたところにあつたという。序文の口述筆記を日本大学講師植木謙英氏、杉浦千代女史が終始を通じて代筆の勞をとり、当時、文部省在勤の梅田義彦氏が諸種の資料を寄贈されたという。

また乃木神社とも深い關係があり、博士は昭和二十四年五月以降、東京乃木神社の信典結集の大業を委嘱された。戦後白内障のため殆ど視力を失いながら衰眼を摩抄して本書の謹撰に当られた。『吾が行く神の道』（乃木神社信仰要説）ついで大著『知性と宗教』（乃木神社信仰原典）となつて昭和二十七年東京錦正社から刊行された。四か年にわたる研究の成果である。（博士七十九歳）

博士は乃木將軍を聖雄として信仰することが久しかった。『神人乃木將軍』と題する一書を刊行したのが大正元年であるが、それから四十年を経過して大著『知性と宗教』となつて大成された。本書にはサブタイトルとして「聖雄信仰の成立」という別名がつけてあるが、いわば乃木教ともいべき信典の成立を意味する。

博士は終戦後その著書『日本精神と死の問題―乃木將軍の死を中心として―』ならびに『記念学会紀要別冊』『坂翁大神宮參詣記と敬神尊皇（文部省刊行精神文化研究叢書）の二書が占領軍当局の忌諱にふれ、かつ陸軍教授であつた

ため公職を追放され、ついで恩給を停止されることになった。乃木將軍と博士とはこのような不思議な結びつきをもっている。それだけ博士が老体渾身の勇をふるって執筆された『知性と宗教』には、老博士の執念ともみられる悲愴な情熱を感じずにはいられない。このことをさらに掘りさげてゆくと、やはり大正元年十一月上木された旧著に『神人乃木將軍』と題された精神と結びつくものがあり、それが決して「不思議な結びつき」でなかったことが証明される。

そのわけはつぎのようである。

大正元年九月十三日の夜八時、明治天皇の御轎車が宮城を発輓になるのを合図に、その御跡を慕い奉った乃木將軍夫妻は、もはやこの世の人ではなかった。博士はそのころ、陸軍教授として陸軍士官学校に奉職しておられた関係上、校長から乃木將軍の自決にかんして、将校ならびに生徒に一場の講話をするよう命ぜられた。そのとき博士は自分の感想をありのままに吐露するに如かずと思い、きわめて率直赤裸々に、博士の哲学・宗教学等研究上の知識を活用して感激のまにまに講話された。その当時の講演草稿を基礎として、直ちに一書を編して刊行されたのが『神人乃木將軍』で大正元年十一月に発行された。ついで本書に新たに第一章を執筆し、さらに最後の第七章乃木聖雄生祀の学的新研究を加え、改訂増補版として題名を『日本精神と死の問題——乃木將軍の死を中心として——』と改めて昭和十四年三月発行された。すなわち旧著刊行から改訂増補版の新著が刊行されるまで、二十七年の歳月をへている。『本邦生祠の研究』が刊行されたのが昭和六年十二月であったことを思えば、博士の生祠研究はほぼ円熟大成の時期であったと申してよい。そこに第七章として「乃木聖雄生祀の学的新研究」が増補された理由がわかる。乃木聖雄生祀は語をかえて言えば、神人乃木將軍ということになる。人即神教の立場からいえば、まさしくそうならざるを得ない。しかもそれは、明治天皇の大御心を遵奉された將軍ということになる。博士の言葉を引用するとつぎのようになる。

「誠と云ふことは、明治天皇の治国安民の根本的御精神であつた。御製を拝読しても誠を御読みになられたものは

数多く、殊に、眼にみえぬ神の心にかよふこそ、人のこころの誠なりけれ、と仰せられたが如きに至つては、実に明治天皇の宗教的御経験の真に深くあらせられたと云ふことを恐察し奉るよすがになるのであるが、その赤誠至誠の化身権化とも云ふべき人は、現代に於ては則ち乃木將軍の一生であつたのであるから、此の点より觀察しても如何に乃木將軍が軍人として明治天皇の股肱となつて、能く其の頭首と仰がれ給ふ所の明治天皇の大御心に副ひ奉つたかと思ふことを想見するに足るのである」

「誠の権化、誠の化身とも謂ふべき乃木將軍を御感化遊ばさるるに至つた明治天皇の御盛徳は如何に高大であつたか実に申すも可畏きことである」

「我々は乃木將軍の忠義の死を通して明治天皇の御盛徳を景仰し奉るよすがが益々鮮明になり、多くなつたことを有難く感ずる。此の点からも將軍の死に無限の感謝感激を捧げざるを得ない次第である」

以上の博士の文章を熟読することによつて、われわれは加藤博士のうちこみかたの尋常一様でなかつたことがわかる。

この歴史的ともいふべき名著『日本精神と死の問題——乃木將軍の死を中心として——』が占領軍の忌諱にふれて公職追放の処分となられたことは、陸軍教授であつたがため恩給停止という措置とは別次元のものであるこというまでもない。いうならば、加藤博士は乃木將軍のあとを追つて昭和二十三年三月二十二日（官報発表）殉死せられたと申してよいであろう。昭和二十七年（七十九歳）のとき刊行された『知性と宗教』には「聖雄信仰の成立」という副題がつけてある。大正元年から延々四十年にわたり、ついに大成された乃木神社信仰原典というべき地位にあり、博士の名を不朽に止めるものといつて差支えない。

○ 博士晩年の人柄を現わす文章が博士と懇意だつた聖徳学園の機関誌「聖徳」と富士文庫の機関誌「富士文庫報」に

毎号連載されて残っている。記念出版『神道信仰要素序論』の後半「餘録」直言直行に富士文庫報昭和三十二年五月以降の随筆が載っている。このなかに「今でも私が敬意を払う二先生」と題するエッセイが注目をひく。博士が一高在学中に英語を教わった斎藤秀三郎氏と、東京帝大の哲学科に入学した一年生のとき国文を担当された飯田武郷翁のことである。

飯田翁は当時大学助教授で万葉集の講義を担当された。元来西洋哲学が主だったが、哲学科の学生には講義の評判はよくなかった。専門が違うからだ。高校文科の教授のように万葉集の昔風の文学解釈では余り気乗りがしない。講義をきくのが嫌になることもあり、唯カリキュラムの中にあるというだけで、嫌でも聴講するという苦しい立場に学生はおかれていた。然るに何ぞ知らん、この先生は後に『日本書紀通釈』という著名な大作を世に公にして、それはわれわれが神道等を研究する時に、本居宣長の『古事記伝』と同様、日本書紀研究のためには座右におくべき宝典であった。かような大先生も東大では単なる一助教授であった。そのころ古風な学問系統を辿られた先生方に、栗田寛、根本通明、星野恒という三大家がおられ東大の正教授であった。その間に立って後に本居翁の『古事記伝』にも比すべき『日本書紀通釈』の大著、スタンダードともいべき名著を公にした飯田先生は単なる一助教授で終ってしまった。運命の数奇またここに至るかと同顧すれば感深いものがある。蓋し大学には教授助教授の定員数もあり、人事の仕組から同じ学力をもっていても飯田先生のように万年助教授で終ってしまう方が出ることは、やむを得ざる実状と言わねばならぬ。しかも真実の先生というものは、そんな人工的な煙幕のために左右されてしまうものではなく、『日本書紀通釈』という名著がものを言つて、飯田先生は死後その真価が世間に認められるようになったのもまたほえましい事実である。ヘーゲルもいった通り、「歴史は神の永遠なる審判である」とはこのことをいうのであろう。

つぎに斎藤秀三郎先生について思いだすことは、一高時代英語の訳読を習い高校卒業の最高級生であった時、エマ

スンの論文集を教えてもらった。英語もむずかしかつたが、哲理思想がなかなかなので、高校生には手強かった。平素もよく勉強したが、試験前には同級生かれこれ一、二名集って復習をした。ようやくそれが終わったとき茶話に、先生はなかなかえらい、われわれ学生がいくら字引をひいても意味がよくとれぬ。しかるに先生が一度訳をつけるとハッキリ意味がよく分ってくる。実にその技は堂に入ったものだ、談笑の間に先生の英語力を感歎したものだ。さもあるべしで、この先生は高校教授の榮職を自らなげうって辞職し、神田の学生街に正則英語学校を創立し、自ら校長となってその経営に当り、学校教育と並行して英文法を基礎としていくたの名著を統刊し、英和・和英の斎藤辞典のごときは、実に画期的のものであった。これらの著書によって当時英語界の榮冠をかちとられた。

回顧するに、私が帝大文科を卒業した後、先生の雷名は天下に著しくなったため、東大は、先生を講師に招いてその得意な講義を委嘱した。当時の文科大学長坪井九万三博士は変り種であっただけに、自ら先生の教室に聴講し、その優秀な学力に驚嘆されたという。

かような次第で齋藤先生も油がのり、平素の講義は振ったものであったといわれるだけに、試験の採点もなかなか厳しく、そのためついに学生間に非難の声がでてきた。そこで先生は直ちに辞職を出願した。しかしこの名講師をやめさせることが如何に大学の損失であるかを思った時、総長山川健次郎博士は、先生留任の懇請のために自ら歩を狂げて先生の自宅を訪ね、辞職を思い止まらせようとした。しかし剛腹にして、自信満々たる先生は、ついに総長の懇請をも拒絶して再びその講席に戻らなかつた。伝えて美談とした。今日に至っても私は勿論、齋藤先生を知る者の多くが、先生を英語学界の稀有の偉人であったことを認めぬ者は一人もなからう。

さきに述べた飯田武郷先生といい、齋藤秀三郎先生といい、今日なお、私の脳裡にその印象が鮮明に残っている先生の一記憶であるということ、ここに述べて、その遺徳を追慕する。ここに至って私はかの孔門の弟子子路が、孔子の盛徳あつてしかも窮迫放浪の一生にふかく思いを至して、「容れられざる何ぞ病まん、然る後君子を見る」と

讚歎した語を追想せざるを得ない。(文、取主意)

この文章をとくに引用したのは、つぎのようなわけがあるからである。

博士の述懐は、一言につくせば「私の専攻学科であった神道の研究は学難を蒙ったこと甚だしいものがあった」という心境につきる。博士が逝去される前年昭和三十九年十一月十二日づけで、私信を頂いたが、そこには菅公を詠まれた漢詩が認めてあった。

廟堂朝蒙^レ厄 夕忽遠流人

世間終若^レ是 超然拜^ニ仏神^一

別紙には「私は昨今、古く日本の大人物中、菅公に關し左の感想を抱いています。生祠研究会をして世の実用に立たしめようとするならば、菅公は模範的な大人物と存じます。乞御高見。」

いうまでもなく、神道を専攻する学徒にとっては、戦前・戦後を通じてつねに「学難」の嵐の中にあることは昔も今も変りはない。とくに博士のごとく、終始神道の学術的研究に一身をゆだねられた学者にあっては、平然として一つの道を進むことは勇気を要する仕事であったに相違ない。平和の時代に平和を口にすることはやさしい。肝心なのは平和の心を堅持することは戦争の時代以上に強い意志と信念、とを必要とするであろう。博士の壮年時代は縦横の活躍をなし得意の時代であったとすれば、東山学労働時代は戦前とは正反対に逆境のドン底におちて生活にも不自由を感じるとともに、白内障のため半盲となられて、ふつうならば愚痴のひとつもでたかも知れない。かかる状況が二十年もつづいたのであるから、ふつうならば意気銷沈して白髪の老翁となり、苦悶の連続だったかも知れぬ。公的の交際を辞退して不受不施をたらぬき、不撓不屈の研究をつづけ、研究即常業の根本精神を倦まず厭わず、隆替を以て心とせず、平然としてその研究に没頭された。

ところが思いもかけず、昭和三十五年文化の日に学功により紫綬褒章授与の天眷に浴した。そのとき博士はすぐに

道元禪師が紫衣を後嵯峨天皇から拝受したとき、その恩詔に答えて「永平雖谷淺、勅命重々々、却被笑猿鶴、紫衣一老翁」と詠じたことを思いだされてふかく感動された。「道元禪師のような、身心脱落浮世の名利を余所に見ている高僧にあっても、やはり日本人で殊に公卿の出でおられた方においては、皇室に対する敬意の深きものがあつたと見え、勅命重々々と詠まれて天恩に感謝しておられるのは、いかにも奥床しき極みである。しかも禪師は不徳な自分の如き者が、紫衣など着用しては却って山中の猿や鶴にさぞ笑われることであろう、と云はれているところに、禪師恭謙の表情も自から読取されるのである」とは博士の述懐である。博士はこのとき、感極まって「感泣半盲愚昧翁」と天恩に感泣された。

翌三十六年博士は八十八歳（米寿）を迎えた。紫綬褒章と米寿と重なったので、ふつうならば旧知新友たちが盛大な祝賀会を催すことは、世間の常識である。しかるに博士は不受不施の信条を奉行していたから、この申し出を固辞した。ひっこみがつかなくなった旧知新友たちはここで話題をかえて、学究の業績をまとめ一冊とし、学界に寄与するという名目で、米寿記念出版を試みようとした。さすが頑固な博士も、業績発表の記念出版と申し込まれたでは固辞する理由がない。博士は名利金銭には、きわめて恬淡だが、こと研究となると熱気をおびてくる。たとえば明治聖徳記念学会にも研究所があり、学労窟にも研究所の名がそえてある。草庵で晩年を花鳥風月を友として悠々自適の生活を送ることは、博士の好みではない。このことは博士が逝去されるまえ、託された言葉と符合する。自分が死んだら近親者だけで密葬して、華々しい告別式をあげるには及ばない。その代り、適当な時期をえらんで「學術講演会」を開いてほしい、というのであった。旧知新友、藤玄会の各位が相談して加藤博士追悼の「學術講演会」を昭和四十年五月、国学院大学大講堂で開催したのはこのためである。そのときの講師は、東大教授中村元博士、東海大教授梅田義彦博士、国学院大学教授安津素彦博士、玉川大学教授小林健三であった。いずれも生前博士の指名されたもの、この講演要旨はその後、一冊の小冊子として頒布された。昭和五十年博士十周年を記念して同様記念講演会

が国大講堂で行なわれたのは、こうした理由によるものである。この日はまた加藤玄智博士記念学会発足の日でもあり、参会者には博士の略歴、主要著書、論文目録、会則などが配布された。

むすび

以上述べたところをまとめると、つぎのようになるであろう。

一 博士の研究の出発点は、知識と信仰とが両立するかという疑問にあり、その結果、両者の調和共存するゆえんを学位論文『知識と信仰』で示された。これによって博士は、世界の諸宗教を科学的に講明することの自信を得た。

二 日本宗教の研究によって神道及び儒仏二教との交渉関係、またわが独特な国体、武士道の由来がわかってきた。これらは日本の教学とみるべきだが、ことに神道がわが建国の大本、国民思想の源流をなしたことの多いことが判明した。そこで科学的に精確な神道研究の必要性を思い、ここに、明治聖徳記念学会を設立し、研究所を基盤に研究を始めた。多くの著作群のなかでとくに意を用いたのは、校訂古訓古語拾遺（岩波文庫本）、校本古訓古語拾遺（記念学会刊）、本邦生祠の研究（記念学会刊）であり、いずれも五十代の作にかかわる。畢生のライフ・ワークは、生祠研究の理論と応用の大成と、神道書籍目録（明治以前・明治以後）の編集と発行である。しかもこの大事業はいずれも後に委託されて他界された。

「生祠研究……この研究は決して急ぐものではなく、私が他界した後でも、神道又は神仏研究の好資料とお考えになるなら、私の死後も諸賢の研究題目中に「生祠」の項目をお加え下され、その研究より推して神道または神仏研究に新生面を拓いて頂けば有難し。畢竟私の目標はここにあるのですから……」（昭和三十八年五月廿四日つけ私信）

つぎは神道書籍目録についてであるが、この目録についてはつぎのエピソードが伝えられている。戦前伊勢の神宮皇学館の官立大学昇格問題のおきた時である。議会である議員が、いったい神道を専攻する大学が必要な程、研究す

る書籍があるのか、と質問したさい、当局者は昭和十三年度に刊行された『神道書籍目録』を持参し、サアこの通りですと示したので、無事難問がさげられた、という。このことは安津博士が『神道学』誌上の書評にかいているから、信じてよい事実である。

神道書目の件については、はやく昭和二年のころ井上哲次郎博士が『神道大藏経編纂の必要』という一書をその年十一月に刊行されている。それ以前では井上頼教編『神書目録略解』明治四十五年稿、原本六巻がある。井上頼圀校閲とある。無窮会・東北大・明治聖徳記念学会旧蔵で、写本三巻である。井上頼圀博士も名著『古事記考』で国書解題の仕事を始められたが、あとつづくものがなかった。その後大倉精神文化研究所から昭和五年『神道関係書目刊本の部』が刊行された。一〇〇ページの小冊である。昭和十二年佐伯有義博士によって『神道分類目録』が春陽堂から刊行された。本文六五二ページ、索引一〇四ページにおよぶ大著である。仏教には大藏経があり、道教には道蔵があり、儒教には四庫全書目録があり、研究にことかかない。しかるに神道にはこれに類する目録がない。そこでその必要性を痛感した加藤博士がうちこんだ大事業が、まず細大もらさず神道に関する文献の集大成であり、そのためには目録が優先する。そして万難を排して大著二巻を刊行されたのであるから、神道研究者は本書に頭を下げざるを得ぬ。しかし博士はこれらはタタキ台であるから、この後さらに研究者が力を合せて『神道書籍目録精撰』と命名して刊行することを期待された。後生に課せられた責任の重大さを痛感せずにはいられぬ。

このことを博士十周年を機として、江湖に訴えておきたい。最後に博士の平常守られた信条「自行三則」をあげてこの稿を終ることにする。

(一)至誠一貫 (二)信愛終始 (三)精進常樂

注

(一) 田辺勇氏「学田拾穂」による（『学校教育と成層圏の宗教』外篇所収）

④ 加藤博士著『神道信仰要系序論』参照

⑤ 明治聖徳記念学会趣意書は創刊号に掲載さる。四〇〇字原稿三枚半にわたる。その中に「時偶々、明治聖帝の登遐とうかに遇ひ奉り、全国民を挙げて忉々たうたうの至情禁する能はざるものあり、貴賤老少各其分に応じて争ひて、哀悼の赤誠を捧ぐ。是れ我等亦聖帝の洪恩の万一に酬い奉らんとする微衷、此に新に明治聖徳記念学会なるものを組織し、内に在りては深く日本の精神的文明を研究して能くその科学的の精緻透徹を致さんと期すると同時に、外に向ひてはその研究結果を内外文の紀要に公表して、彼れ外人をして、我日本の真相を会得せしむるに至るの一助たらしめんことを切望して已まざる所以なり。我等固より浅学菲才徒に任重くして前途の遠きを思ふ。偏に内外有志の協賛を仰ぐ。大正元年十一月三日 明治聖帝天長の佳辰に於て」とある。

付記

本稿は昭和五十年五月十六日加藤玄智博士十周年記念講演会（国学院大学大講堂）における講演原稿に加筆したものである。